

○地震の大疑問？が、解けました。

地震の理論やメカニズムは、未だ、正しい観測方法や予知技術が、発表されていません。(地震学界全体で、解明できず地震予知が困難な状態です。)

◎<当予知理論>は電磁観測データで構築しました!

- ①地下で、撻や歪みや、軋轢等の圧力が集中すると 圧力や応力波が発生し、周囲へと伝播します。
- ②この時点で、殆どの軋轢や応力波は、深層の周囲 地圧に圧倒され、地震動は起きていません。
- ③しかし、地表層まで伝播すると、周囲の地圧が殆ど 無くなる為、圧・応力波は膨張拡大し、周囲を破壊し、地震動を起こしています。(観測Data有り)

地震の「振原」は地下深くでは無く、実際の破壊や断層等は表層付近で起きています。この地震の新理論とメカニズムは、地震前兆の電磁波の観測データと、実際の地中観測データから、根本的な裏付けがあります。現在の震源推定は、振動の発生状況に無理があります。

災害予防に地象観測が最高！ 地殻観測は電磁気と地震計で完

• 地象観測の目的と概要

地象観測は、地下全体の動きを把握し、地震の警報や、噴火等の危険予防に活躍できる観測です。

• 現地震計の観測も活用

現在、気象庁や各機構と市町村等で約4千機が稼働中で、地下深部や海洋の観測網も拡大中です。

• 電磁気(波)の観測が必要

電磁気(波)観測は、地震等の約1週間前に異常の前兆が掴めることから、最も注目されています。

• 地象観測の観測網構築

- 1 電磁気観測で、約1週間前に危険度や切迫度が判るメカニズムが解明できたことから、ようやく地象観測が脚光を浴びています。今後急速に地象観測の研究や開発が進むこととなります。
- 2 地震の原因は、プレート移動だけでは無く、多くの起因がありますので、地象全体の観測技術や研究が発展するので、天気予報並みの地象観測情報と危険警報等が可能になります。
- 3 地震の地象観測は、地球規模でマグマや地殻の動き等を観測する必要があります。今後は、世界規模で観測ネットワークを構築することになるでしょう。

地殻変化で現れる電磁波(気)現象!

◎電磁パルス (ノイズやパルスを観測)

大地の軋轢状況把握(アースノイズやパルス)

◎地電磁界 (低周波放送以下のアース領域)

直下型地震等の把握 (大地からの電磁界を観測)

◎短波帯 (BC放送帯からHF帯ノイズ迄)

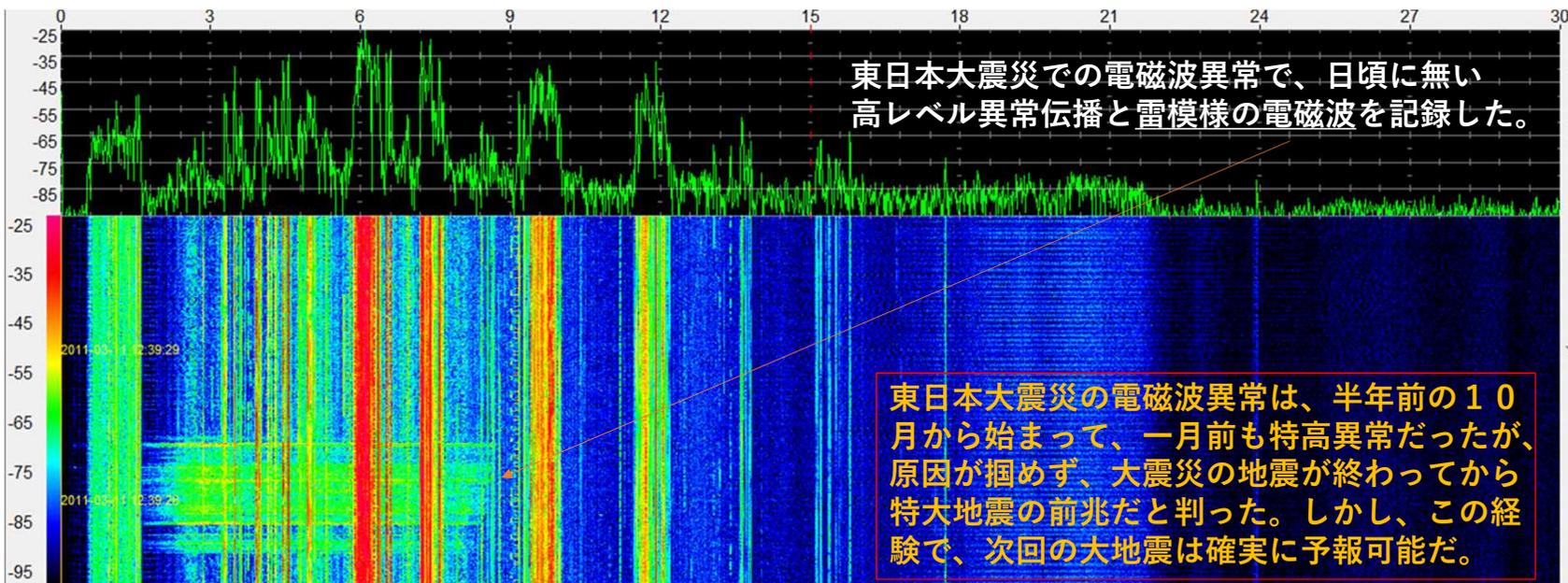
広域型探索 (AM放送や電離層反射波を観測)

◎FM波 (FM放送波等を全国網で観測)

観測網 (FM放送波の常時観測から各解析に利用)



短波帯とAM帯とFM帯域の観測例



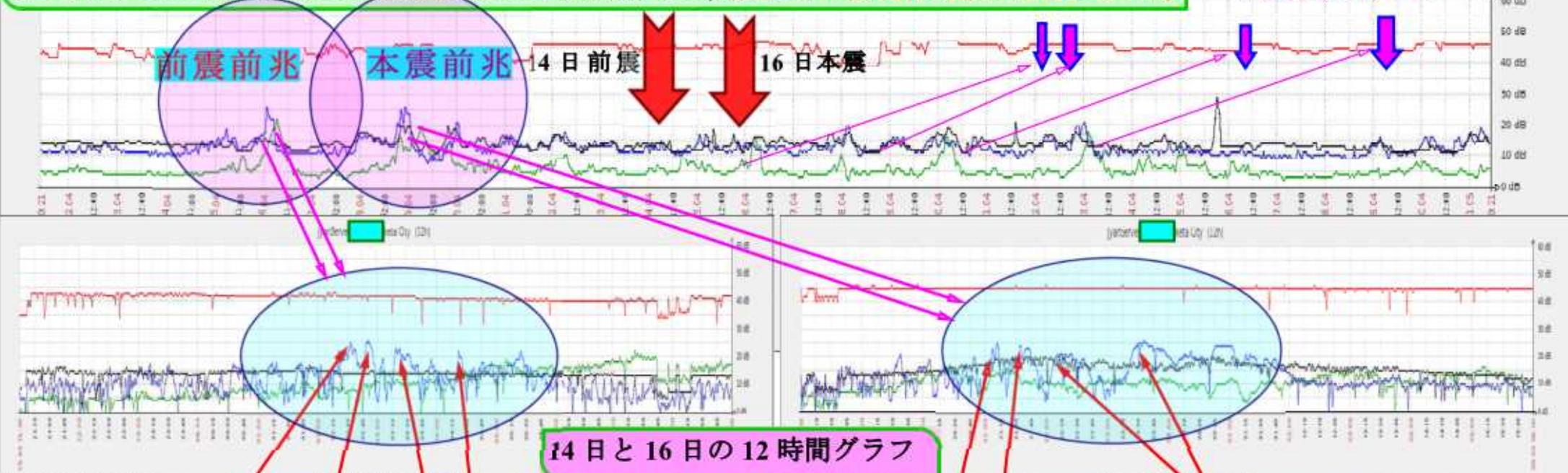
東日本大震災での電磁波異常で、日頃に無い高レベル異常伝播と雷模様の電磁波を記録した。

東日本大震災の電磁波異常は、半年前の10月から始まって、一月前も特高異常だったが、原因が掴めず、大震災の地震が終わってから特大地震の前兆だと判った。しかし、この経験で、次回の大地震は確実に予報可能だ。

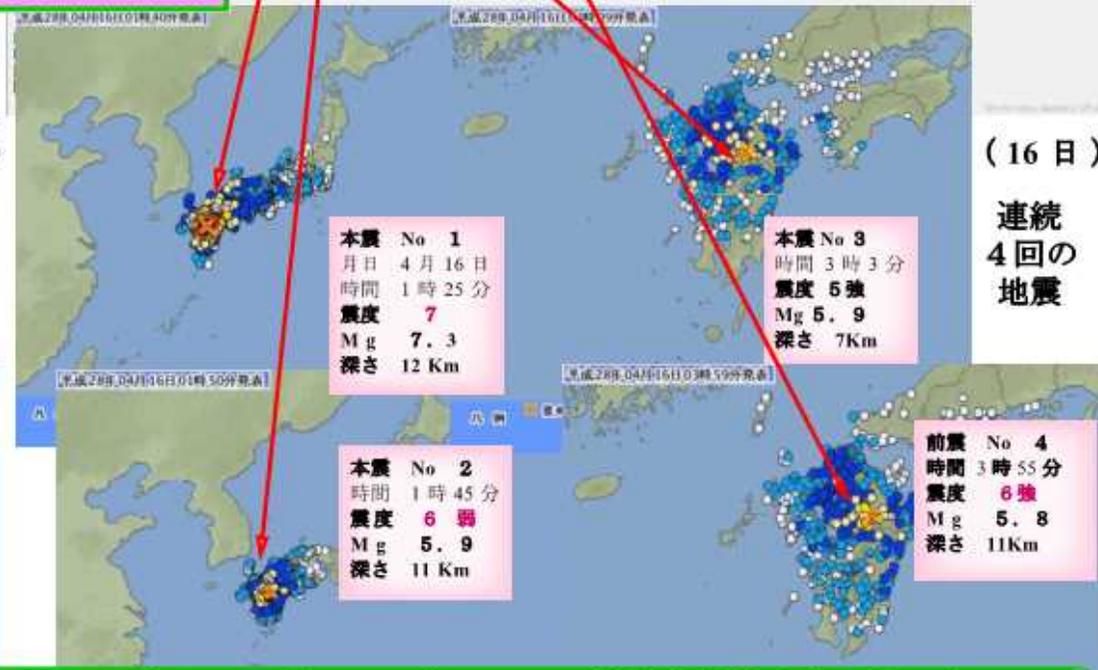
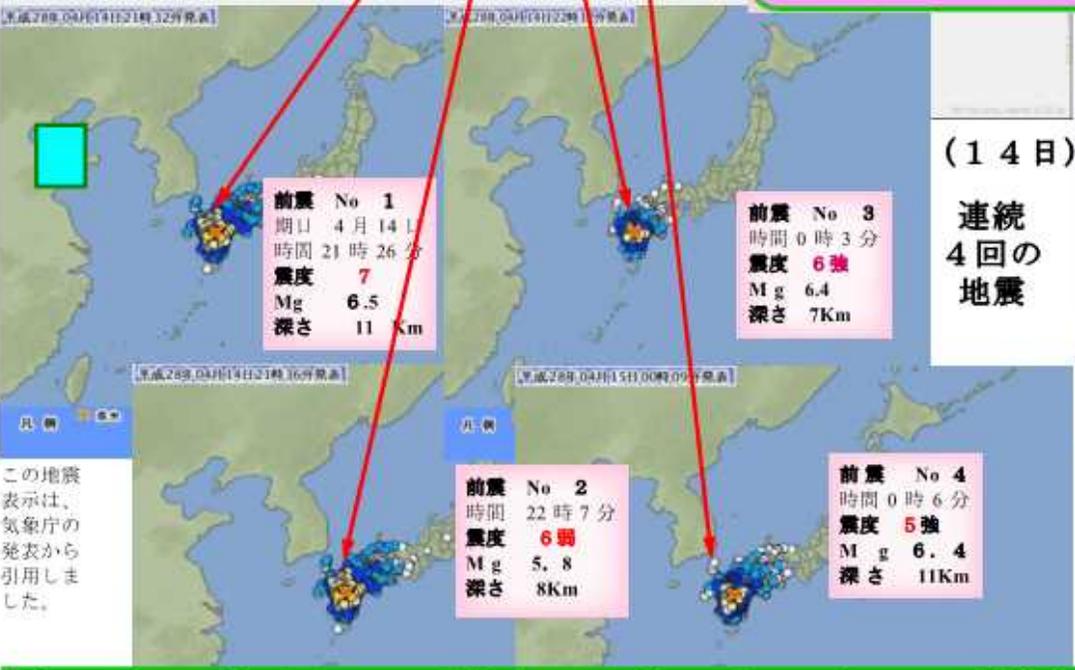
3種観測
3原則と
切迫度を
最高度に
発信可能

2016年4月の熊本地震で竹田局が記録した1ヶ月間グラフ,両方とも1週間後に地震が発生しました。

各余震もほぼ一致



14日と16日の12時間グラフ



グラフ上は、竹田局の1ヶ月間グラフです。4月6日と9日に異常なピークがあり、4月14日と16日に大きな地震がありました。グラフ中段は、左半分が14日の12時間グラフ、右が16日の12時間グラフです。青色が熊本の電波で、上下が電界強度、横軸は時間
2回の異常と前震、本震 & 両方とも≒4回の異常ピークと実際の地震がほぼ一致しています。

この地震表示は、気象庁の発表から引用しました。

電磁波観測と地震の確率 (1週間前に予知3原則を超越) 最高の例 (熊本地震) 前震 95% & 本震 90% (回数 & 時間)

グラフの解説

右グラフは熊本地震の前震と本震の電波観測と、実際に起きた地震の記録を3原則や時系列で照合した6時間の観測グラフ
青の下向き矢印は電波観測から地震の予想 (異常ピーク) です。

赤の上向き矢印は実際に地震が起きた時間と分を示しています。

◎前震、本震とも異常回数と地震発生回数や時間と大きさが同じです。

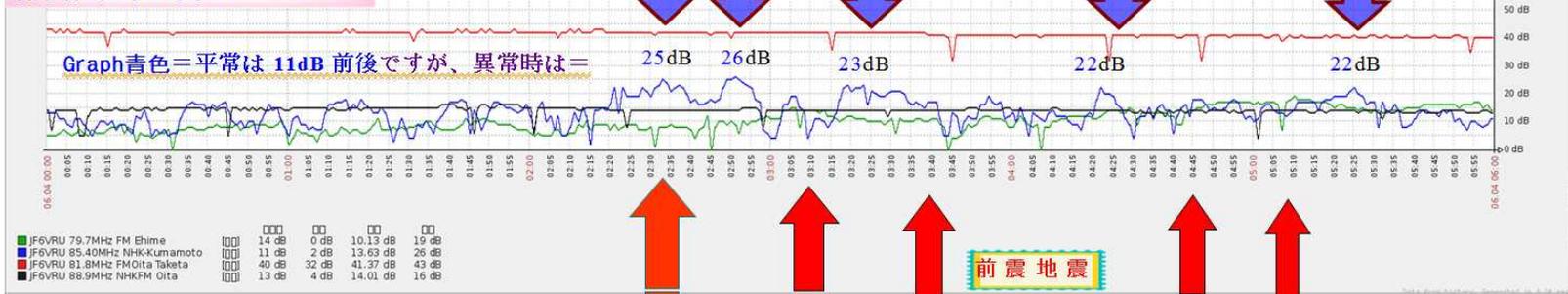
◎電波観測の異常ピークの間隔時分と、実際の地震が起きた経過時間も同じになっています。

結果

- 1週間前に、異常を観測した通り、地震が起きた事 (証明) となります。
- 電磁波異常と実地震が、同じ原因なので、同じ現象となる観測データです。

青の下向き矢印は、グラフの電波観測 (青ライン) での異常ピーク時です。

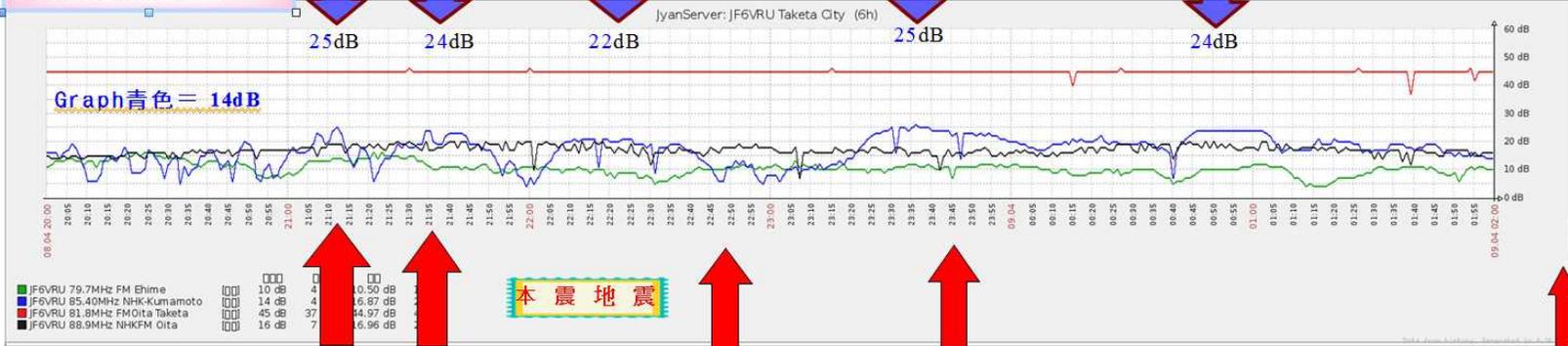
前震照合グラフ



前兆と地震回数が一致!
(前兆間隔)
時間や間隔も概ね一致

観測時間 4月6日	2:33	2:52	3:23	4:22	5:25
地震間隔	(19分)	(31分)	(59分)	(63分)	
発震時間 4月14日	21:26	22:07	22:38	23:43	0:03&06

本震照合グラフ

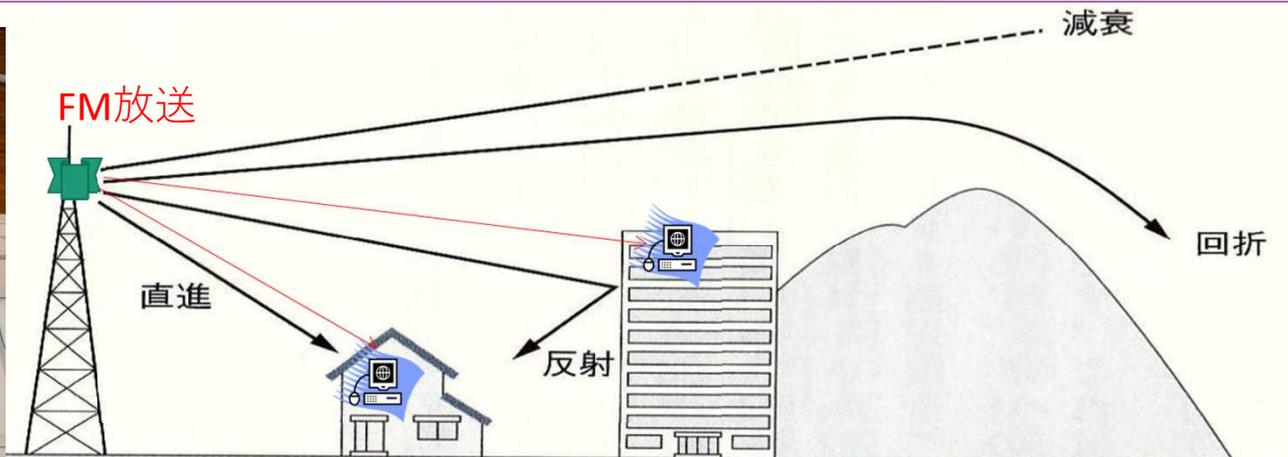


前兆と地震回数が一致!
(前兆間隔)
時間や間隔も概ね一致

観測時間 4月8日	21:13	21:35	22:20	23:35	4/9日 0:55
地震間隔	(22m)	(45m)	(75m)	(80m)	(196m)
発震時間 4月16日	1:25	1:44	03:03	03:55	07:11

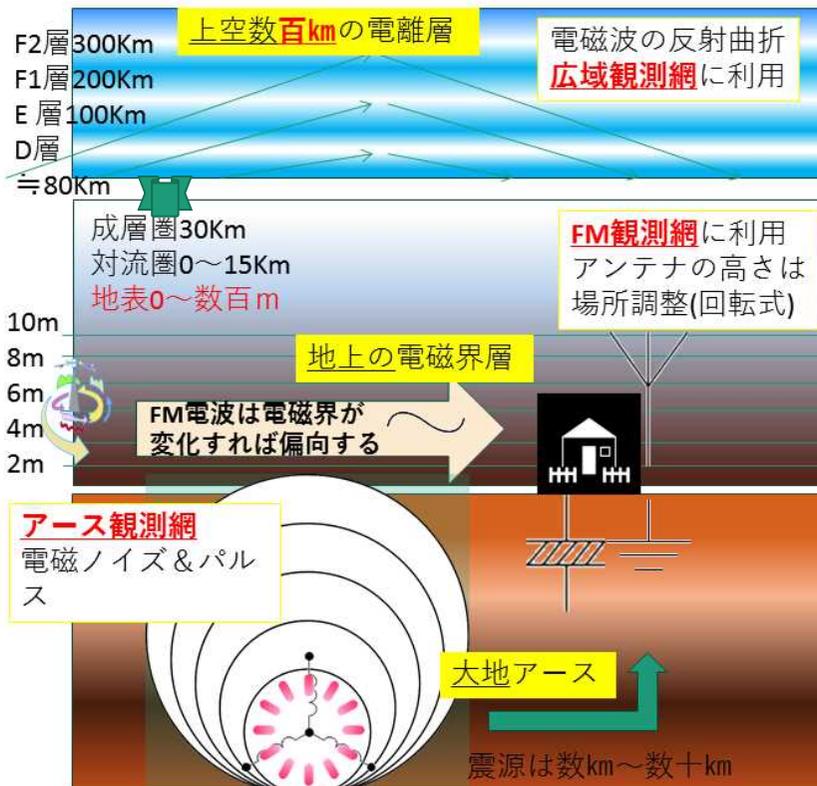
本震も回数が一致!
時間も、概ね一致!
これが一週間前に判るとは!!!

地象観測の電磁波受信と観測等の要領



上空と地表と地下から

上中下観測



3 電離層は
上空≒200km
DEF2層

1 空気接地層

1.5 電磁界層
• 地上高数m~
• 遠地は数百m

2 大地アース
• 震源の深さ
数~数十kmで
軋轢臨界発生

FM電波の受信観測網は
4~8CHを常時観測しています。
東西南北等で方向探査に利用できます。
FM電波は、常に電力が一定なので、放送波の伝搬ルートに変化があれば、電界強度が直ちに変わするため、観測に適当です。



なぜ、地震予知ができるのか？

メカニズム と 理論的 解説

電磁波観測と地中観測Dataから説明可能！

- ① 地震の原因は多種多様だが、主な原因として、地殻を変動する歪や縞等の軋轢に、各種加減圧が加わって、地震の元となるエネルギーと、反発的応力や、電磁気までが発生しています。
- ② この電磁気は周囲へ伝わり、地上でも直ちに観測できるが、地震を起こすパワーやエネルギー（以後「PE」と言う）は、地下深層の場合、周囲の高い圧力に阻まれ、破壊的な地震動にまで、発展できず、PE波として周囲へ波状で伝播しながら拡散します。
- ③ PE波が表層の低圧域まで伝播すると、PE塊は、周囲の圧縮力低減で膨張を始め、周囲を破壊し亀裂や破断等の、地震動を起こします。PE塊が大きい場合は、振原域も広くなり、断層が大きく、連続的な地震をも誘発する事が多くなっています。

地震電磁気(電波)と 軋轢パワー(力波)

電波(即)と 軋轢波(数km/日) [伝播解説図]

地表での電磁波観測
(震源～直接波利用)

- アースから受信
- 地表での間接受信

高度の技術が必要!

地震電磁波とカパワーの伝導伝播

地中～の電磁波観測
(震源～直接波受信)

- アースから受信
- 地表での間接受信

変化は分かり易いが
高度の技術が必要!

地層

電磁的地震計

電波観測



表層&地層を破壊し地震動で割れや断層ができる

岩盤膨張

岩盤膨張

岩盤縮小

上層 = 周囲を破壊 = 地震動
地圧小 表層から数キロ

中層 = まだ周囲の圧力高い
地圧中 中層で数キロ～数十キロ

下層 = 周囲は高圧で破壊的振動は無理
地圧超大 数十キロ～深層は動き難い

地中での加減&応力
(震源～上層～波状伝播)

- 深層 震源超高压域
加減応力も周囲に負け起震×
- 上層 地震の破壊起
加減圧力は波状で届くと膨張し周囲を破壊、地震動起きる

応力等の波動発生



A 地下電磁気

押される = プラス圧電気
裂かれる = マイナス電気
ズレる = 摩擦電気

軋轢等の加減圧力

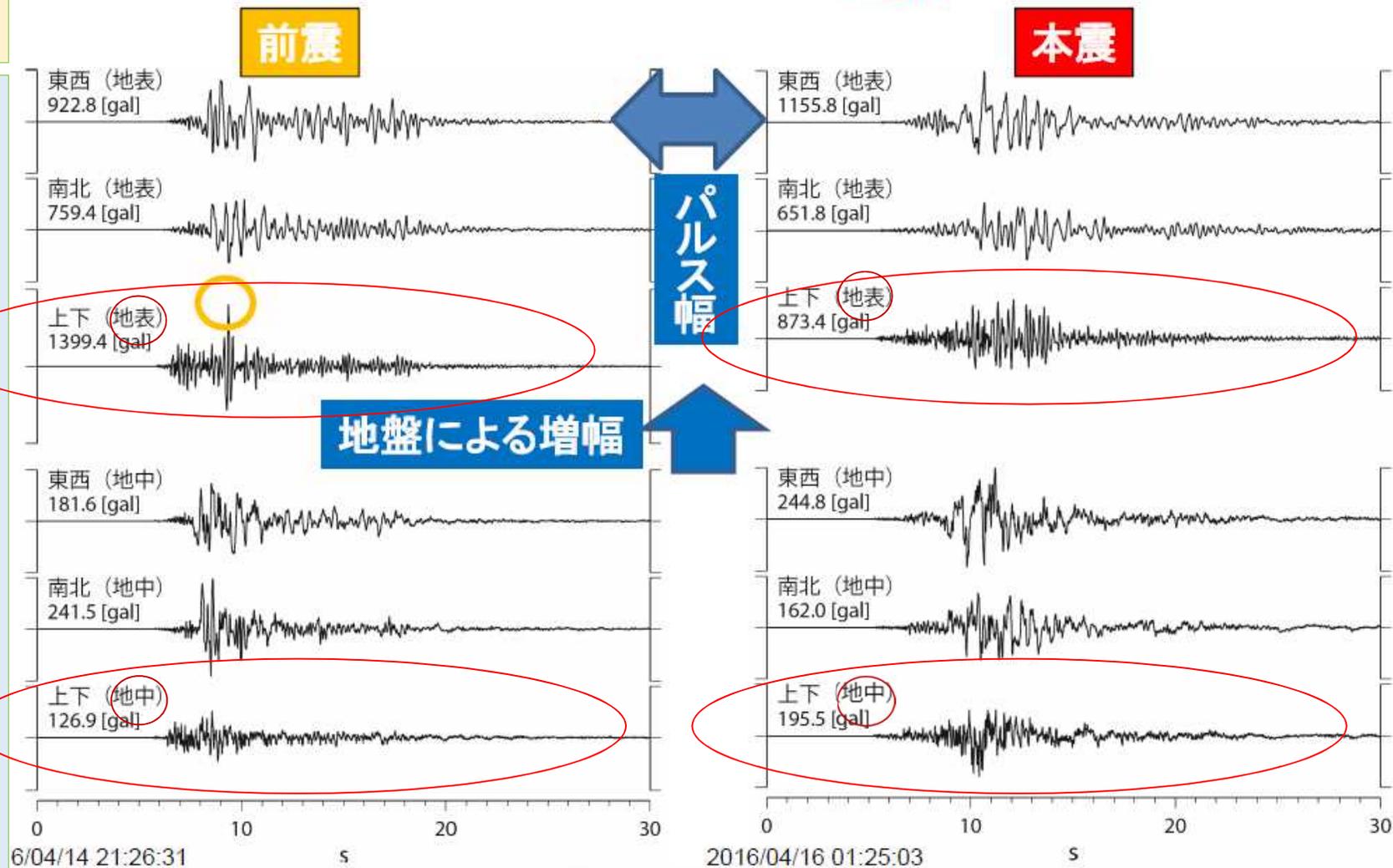
決定的な Data



KiK-net益城で観測された強震動（前震・本震）

大前震及び本震においてK-NET・KiK-net観測点の中で最大の加速度(1,580 gal)は、本震において1,362 gal(三成分合成値)を記録したKiK-net益城(KMMH16, 熊本県益城町)

これが決定的な証拠で、地表と地下250mの上下動の差です。地下数kmは圧力破砕帯が壊れたため、地震が地表にまで伝わりません。



≡ 1週間前に予知可能な根拠 と 電磁波伝搬と力波伝播速度の解説

- 地震の元となる**軋轢**が起きたときに、**電磁波と力波**（軋轢や応力波等）が起きている。
- 電磁波は直ちに地表の観測網に捕捉され異常が察知できます。
- **力波**(パワーウエーブ)は、波状伝播の性質があり早く伝われません。岩地質にもよるが、**一日に数キロ程度**しか伝わらない。(経験則有)
- 従って、**電磁波と力波の伝搬速度「差」**だけ、早く予知できる。
- **根拠データ** (前ページや下記ページ参照、ノイズやパルスも同じ)

特 1 観測網でのDataから{いつ, どこ, 大きさ}が**計算可能**です。

特 2 電磁の3種観測網で、約**1週間ほど前に予測発表**が可能。

結論 「**地象観測**は、電磁計と地震計で地殻変動を**Perfectに把握**」

淡路島は10～15 dBの上昇が続き、ダウンの後地震発生



下図は、当研究会の観測網図です。この他に短波帯観測網とアース観測網があります。FM観測網はクロスチェックや計算式で総合的に3原則を割り出せます。

淡路地震は青の姫路電波がダウン後、全部落ち1週間後に地震

電磁波観測網 (2016年8月)

石巻局
福島局

地震の観測例 (両方とも1週間後に地震発生) 淡路島地震と長野地震は100%

淡路島はレベルアップ (2013年4月)

長野地震はレベルダウン (2014年11月)

その他、例が多数有ります。

観測例

民間ボランティアだから [広がる全国的観測]

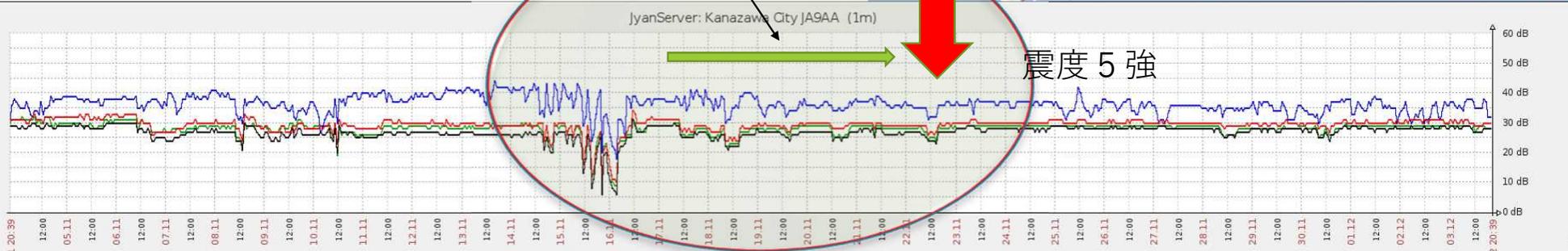
発足から8年、ライブネットの観測網が増え、全データを解析し、経験則を積んだら、地震予報の3要素が見えてきました。



大分ネットは8局で、県内をカバーしています。全国ネットは沖縄～東北迄「50」局で、観測中！各局は東西南北の4放送局を24H態勢で観測中！

FM放送の電波200波Liveで解析中
AM～30Mhz & FM全波 & アース観測等を総合的に判定！

JyanServer: Kanazawa City JA9AA (1m)



長野地震は、4方向の電波が20 dB程のダウンを繰り返した後地震発生

地震予知の3要素 揺れの大きさで震度、揺れのパターンでいつ、揺れの方向Checkで場所

防災/減災)に参加中

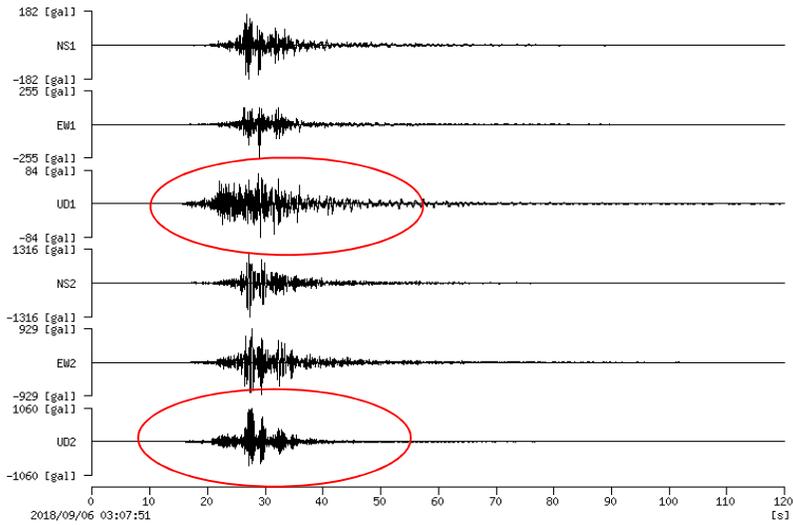
地震のメカニズムや根拠の解説 2 です。 地震は表層破壊と言う根拠データです。

- 地下（地殻の中深層）で、起きた軋轢や応力等のパワーエネルギー（以下 PE という）は、電磁気や力の波として周囲へ伝播しています。
- この「PE」は、圧力の波として一日に数キロの速さで波状に伝播するが、表層に近付くと周囲の抑圧が減って急に開放される。この時「PE」は周囲の減圧に、逆比例して PE 塊全体が膨張します。この膨張が数メートルになれば破壊的振動となり、数 m の断層を作ってエネルギーを発散している。

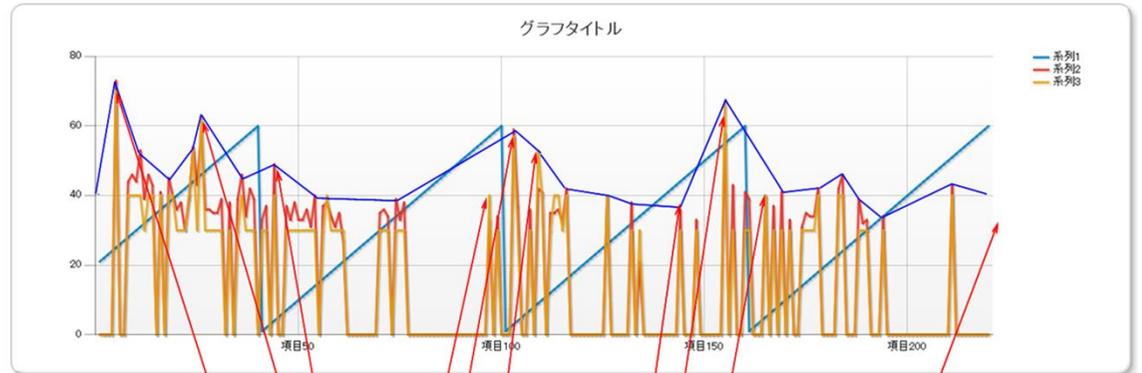
根拠の詳細解説

- 1 直下型地震やトラフ地震等の軋轢は、月や地球の自公転、プレート移動、海流、気象や、マグマ流、地殻移動(上下動含)等々によって生じている。
 - 2 軋轢 = 震源が、深層の場合は周囲の超高压に押され破壊や地震動は殆ど起きません。また、超深層になれば極高压と高熱で熔岩状となり、PE 伝播も数十から数百 km もあれば伝播減衰が大きく地震動も小さくなります。
- 根拠データ
 - 1 全図にある熊本地震や他の地震電磁観測データを参照してください。
 - 2 地下 250 m 付近と表層の振動データを比較すれば、膨張が明快です。

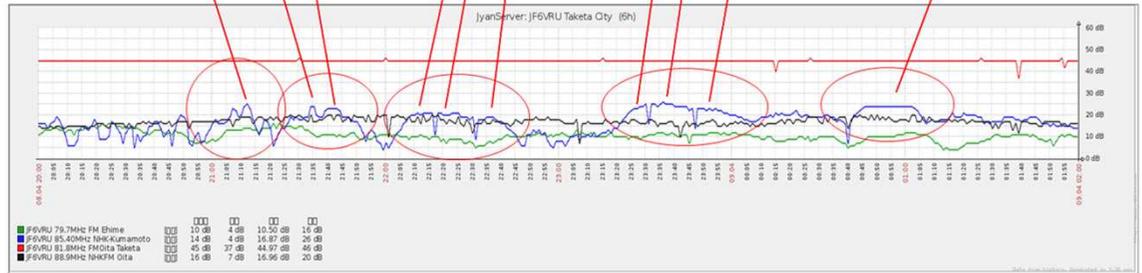
IBUH01 2018/09/06-03:08:06



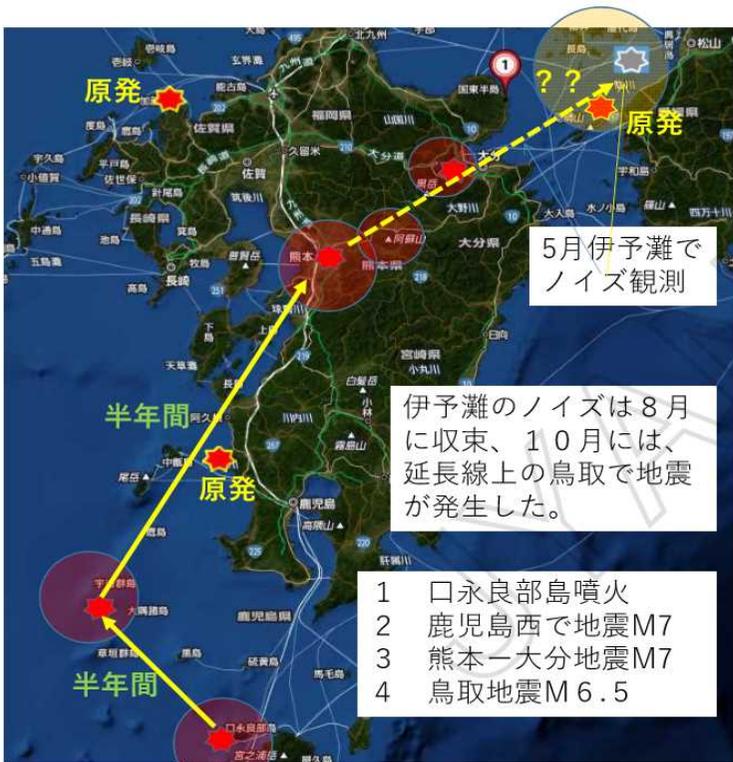
地震観測データ
上は胆振・下は宮崎・大阪



上の空色ラインは、項目50が2時00分～09分まで、項目100＝同3時台、項目150＝4時台で、1時と0分から4時台迄の約3時間の時間経過を示している。

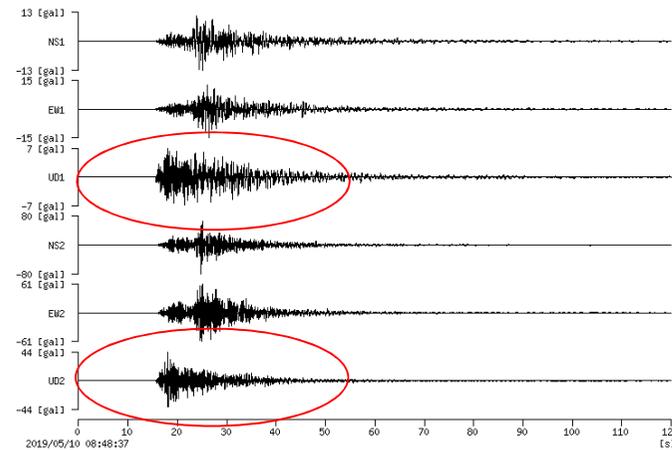


青色注目 4月8日に観測したグラフです。16日に起きた本震も、相似形となっており、1週間前に観測したデータが正しい根拠となった。上図の地震と下図のグラフが同じなのは、発生原因が同じな為で、電磁波と力波の伝導速度の違いが早期予知の根拠となっている。

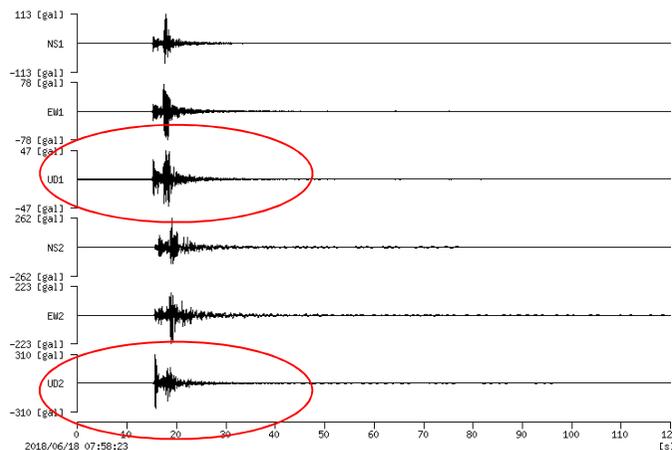


- 電磁波観測から地震発生までの様子
- 地下深層等の圧力状況
- 噴火とEPの伝播状況

HYZH08 2019/05/10-08:48:52



KH05 2018/06/18-07:58:38



KINIED

KINIED

根拠データ

- 熊本地震等の地震波形データ 2 枚
- 気象庁が発表する震源について（当理論と比較）
 - 1 現在の震源は軋轢が起きた場所と予想する。
 - 2 上記 1 であれば、電磁気計算と符合する。
 - 3 震源ならば、地震動の伝達が無く時間も違う。
 - 4 地下 5 0 0 Km 以上の超深層では、地殻が高温で熔融状態であり、地震動は殆ど起こり難い。
 - 5 地下深くは、実際に確認する事が出来ないので、推測発表 Data の確認はできない。